7　神宮医 久志本氏とその秘方

中西淳朗

A、神宮医方の研究について

演者の開業地・横浜市鶴見区の北端、駒岡町に常倫寺という寺があり、その境内に久志本左京亮一族の墓域がある。

この立派な墓域をはじめて訪ねたのは、平成元年のことで、以後少しづつ調査をすすめるうち、久志本常孝先生著の『神宮医方史』並びに、先生が〝『神宮医方』こぼれ話〟と題して昭和六十年四月二十七日の日本医史学会例会に講演されていることを知った。（日本医史学雑誌第三十一巻第四号五七七頁）

これらの資料で久志本氏の役職や神宮医方の特徴がまことに明確に示されている。

残念ながら演者は久志本常孝先生にお会いする機会もないまま、先生は平成九年八月二日に逝去された。先生のお人柄、業績等については、本誌の四十四巻第一号に深瀬泰旦理事が、追悼記でのべておられる。常孝先生は江戸久志本三家のうちの、内蔵允を名のる内蔵という分家の人で、こちらの墓域は横浜市都筑区勝田町の最乗寺にある。

江戸の久志本一族（本家＝式部家、内蔵家、左京家）の医師達が用いた生薬については、『神宮医方史』の中で数多く記されている。

また三重県の神官であった松島博氏は、その著書『近世伊勢における本草学者の研究』において、久志本一族の用いた生薬をあげているが、『神宮医方史』の右に出るものではなかった。

演者は、右の著書や論文に久志本氏独自の処方が記載されていないことに気づき、平成七年より文献調査をはじめた。そして研究第一報として、日医ニュースの平成八年八月二十日号の医界風土記欄に〝久志本家の人々と神仙解毒万病円〟をのせ、続いて「診療研究」平成九年七月号に〝神宮医久志本氏と神仙解毒万病円〟という論

文にまとめ、この中で本剤の構成生薬の分量を掘りおこし、この処方の由来について発表することが出来た。

この間、指導をたまわった宗田一先生が逝去された。

B、久志本氏の処方内容について

前述の如く久志本氏の独自処方と考えられる処方は、秘方のごとく取扱われたためか、全体像が示されずその処方名のみ伝わった感があった。

イ、神仙解毒万病円

この処方は、久志本家では神仙解毒丸と呼んでおり、『寛政重修諸家譜』によると、第十九代常興が後陽成院に本剤を献じ宸筆をたもうとある。また主君である徳川家康も服用していたようである。彼は円の字を用いているが、真柳誠教授のご教示によると、円も丸も丹も同義である。久志本常興は本処方の構成生薬の分量を、大、中、小で徳川家康に教えたと考えられる。この分量表現は、常興の祖父、常光が天文三年に記した「管蠡備急方」に記されているという。

しかし、実は『延寿和方彙函』に、三宅意安処方の万病解毒丹が収載されている。

三宅意安の処方の主薬は次の如くである。

〃五倍子　一両半、山慈姑　一両、続随子　半量、大戟七銭半、麝香（適量？）〃

小松帯刀編の『梅花無尽蔵別録続篇』によれば、〃端午、七夕、重陽ノ日ニ製スルヲ佳トス。一切ノ病ニ用ヒテ妙ナリ。〃とコメントされているが、三宅意安は虫毒、桃生毒、薬草毒等に用いている。

ロ、養中湯

この処方については『京都の医学史』に消化剤と紹介されているが、難治の嘔吐に効ありといい、次の如き内容である。

〃砂仁、白豆蔻各三匁三厘、烏薬二分七厘、陳皮二分五厘、芍薬二分二厘、甘草七厘七分。右六薬水煎すること唯一、二沸にして服す。煎熟せば則ちさらに効なし。〃

この処方は十一世紀初頭に初代常任が作製したと『延寿和方彙函』に記されている。

（神奈川地方会）